

# 国 語

## 注 意

1. 問題は全部で13ページである。
2. 解答用紙は(その1)(その2)がある。(その2)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし、マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

### マーク・シート記入上の注意

1. HBの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する記号・番号の○を塗りつぶしなさい。○で囲んだり×をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答がイのとき)

1	<input checked="" type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/>
---	--

4. 一度記入したマークを消す場合は、消しゴムでよく消すこと。×をつけても消したことになる。
5. 解答用紙をよごしたり折り曲げたりしないこと。

— 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

ポストモダン化する社会は、近代的主体たちの偏執狂(パラノイア)的な努力の帰結としての「進歩」の意味が揺らぎ始める社会でもある。何が人間にとって「良いこと」なのかを一義的に確定できないとすると、社会全体あるいは人類全体にとっての「進歩」を有意義に定義することができなくなる。ポストモダンのな価値の多様化は、諸個人をより自由にするように見える反面、その自由を支えていた「進歩」への「信仰」を内側から解体し始めたのである。

ポスト工業化、ポストモダン化に伴って、(人類あるいは世界史の)「進歩」という考え方が曖昧になり始めると、もともと「進歩」と表裏<sup>1</sup>一体の関係にあった「歴史」という概念自体も揺らいでくる。西欧諸国の言語において「歴史」と「物語」は同じ単語で表されており、近代以前には概念的にも未分化であった。虚構や幻想を含まず、客観的に観察し得る普遍的な発展法則に従って進行していく「物語」が「歴史」と呼ばれるようになったわけだが、その発展法則なるものがあやしくなってくると、「歴史」と「物語」の概念的区分も曖昧になってくる。

人々のアイデンティティ、価値観、世界観が分散化するポストモダン状況においては、「近代」を支えてきた「理性」「合理性」「主体性」「客観性」「合法性」「普遍性」「進歩」——そして「歴史」——といった主要な理念の有効性が疑問に<sup>a</sup>フされ、それらが実は、近代的に主体化された者たちの約束事として通用しているだけの虚構あるいは共同幻想ではないのか、と疑われるようになる。「歴史」と「物語」を隔てる基準になっていた「客観性」や「合理性」「普遍性」などは、西欧人たちが作り出した「近代」という壮大な共同幻想の所産であるということになれば、両者の差異はもともと絶対的なものではなく、「歴史」とは「大きな物語」にすぎなかったのではないかと思えてくる。

ポストモダン系の思想では、ポストモダン化した社会において「歴史(=大きな物語)」は再び「(小)物語」化<sup>3</sup>していき、「(小)物語」同士が乱立するようになることがしばしば話題になる。「歴史」の再物語化は、ヘーゲル=マルクスの意味での「歴史哲学」

もしくは「歴史の目的論」の終焉をも意味する。この方面での代表的な論者は、哲学者のジャン・フランソワ・リオタール（一九二四—一九八）だろう。

リオタールは、ポストモダン社会の特徴をコンパクトに叙述したことで知られる『ポスト・モダンの条件』で、近代以前の伝統社会における「物語的知」の社会的機能と、近代における「科学的知」のそれとの違いを論じている。社会の中で生きている人間は、言語によって約束事を決め、さまざまなゲームを行っており、それらのゲームの規則によって生活のすべてとは言わないまでもかなりの部分が規定されている。「物語的知」も「科学的知」も、そうした言語ゲームによって構成されている。

「物語（語り）」というのは、文化や習慣を共有する共同体の中で神話や伝説などの形で「太古」より語り伝えられ、各人をその共同体に統合したり、正しい行為のための判断基準を提供したりするお話であり、「物語的知」とは、そうした「物語」に根差した民衆の知である。それに対して「科学的知」は、それぞれの領域において普遍的真理を探究する科学者という専門家集団によって担われるものであり、決まった作法に従って自らの主張の「正統性」を証明しようとするともに、証明された内容を教育によって伝承したり、一般の人に向けて「啓蒙」しようとしたりする。こうした科学的知が社会全体に次第に蓄積されていくプロセスが「A」である。

近代市民社会は、一見すると「物語的知」を解体して、「科学的知」に置き換えているように見える。しかしリオタールに言わせれば、「科学的知」が自らの「正統性」を、討議を通して明らかにしたり伝達したりするためには、何らかの形で「物語」に、つまり「科学的知」の尺度からすれば「非知」でしかないものに依拠せざるを得ない。科学的証明の手続きとして専門家の間で通用しているものが、どうして「正統」と言えるのか、その専門家の共同体のゲームの規則を共有していない外部の相手に説明しようとする場合、その「正統性」の基準それ自体を、科学的に「証明」することはできない。例えば、「実験することによって、自然科学の仮説を検証することができる、と考えることができるのはどうしてか？」という問いに、（その前提に依拠している）自然科学自体によって究極の答えを与えることはできない。「科学的知」もまた人間同士の言語ゲームであり、具体的な言語的やりとりを通じ

て人々を納得させることが必要であるとすれば、みんなが(慣習的・無自覚的に)共有している物語の構造を利用することが不可避なのである。

(啓蒙が進行し、さまざまな価値観や視点を持つ人が「科学的知」の正統性をめぐって争う)ポストモダン状況においては、「科学的知」もまた、ある種の——例えば科学崇拜、普遍的理性崇拜といった形を取る——<sup>6</sup>「物語」的な慣習によつて支えられていたことが露呈し、その「物語」に依拠することのメタレベルでの正統性が問われるようになる。「科学的知」が十分に浸透したおかげで、「科学的知」の権威を素直に受け止める人が B、という弁証法的逆転が起こるわけである。

今日の文化・社会——すなわちポスト・インダストリーの社会、ポスト・モダンの文化——においては、知の正統化について問いは全く別の言葉によつて表わされなければならない。大きな物語は、そこに与えられた統一の様態がどのようなものであれ、つまり思弁的物語であれ、解放の物語であれ、その信憑性<sup>しんぴやうせい</sup>をすっかり喪失してしまっているのである。

<sup>7</sup>物語のこのような衰退のうちに、第二次世界大戦後の技術・テクノロジの飛躍的發展の影響を見ることが出来る。テクノロジーの發展は、行動の目的から行動の手段へとアクセントを移動させてしまったのだ。そしてまた、一九三〇年から一九六〇年にかけて、<sup>\*</sup>ケインズ主義の庇護<sup>ひご</sup>のもとに、危機から立ち直った自由主義的資本主義の再發展の影響を見ることが出来る。この資本主義の復活は共産主義への選択の可能性を排除し、富とサービスの個人的享受に価値を与えるのである。

#### 『ポスト・モダンの条件』

ポスト工業社会に生きる人々は、工業社会の人たちと違って、進歩をみんなにとつての共通「目的」として懸命に追求する——という物語<sup>ものがたり</sup>に従う——のではなく、むしろそれぞれの個人としての生活を豊かにする手段としてテクノロジーを利用するようになる。「手段」としてのテクノロジーは、人々が自分なりの生活スタイルを追求するのを助けてくれる。特に情報テクノロジーの

発達によって人々は、自分の価値観に基づいて情報収集をしながら、自らの生き方に合う「物語」をそれぞれのやり方で想像し、互いの「物語」を交換する——あるいは互いの「物語」を闘わせる——ことができるようになる。

ソ連型社会主義諸国に代表される「左の進歩」(をめぐる物語)が、ポスト工業化の壁に突き当たって急速に求心力を喪失したこともあって、「西―右」が掲げる「自由主義」(をめぐる物語)は、西側の先進資本主義諸国でも経済成長が鈍化していたにもかかわらず、諸個人の生活や価値観の多様化を促進するものとして再評価されるようになった。ただし、近代の自由主義が「自由」という普遍的価値の下に人々を集結させ、共通の尺度としての経済的な豊かさを目指して競争させるように作用したのに対し、ポストモダン状況下での、ある意味徹底した自由主義は、人々を本格的にバラバラにし、それに伴って「主体」化に向けての統一モデルを解体する。各人が自らのアイデンティティを「自由」に選び、それをめぐる「物語」を独自に形成するようになるので、何もって「主体」と見なすのか、統一的な基準がなくなっていく。「歴史」という「大きな物語」の終焉とともに「主体」も終焉する。

(仲正昌樹『ポストモダンの正義論』による)

〈注〉

\* 同じ単語……たとえば、イタリア語では *storia*、フランス語では *histoire*、スペイン語では *historia* がいずれも「歴史」と「物語」の意味をもつ。

\* メタレベル……上位のレベル。

\* ケインズ主義……イギリスの経済学者ジョン・メイナード・ケインズ(一八八三―一九四六)が提唱した理論に基づく財政・政策的立場。自己調整機能をもたない市場経済の安定的・持続的な発展・成長を実現するためには、政府が財政政策を通じて有効需要を創出する必要があるとする。

問一 二重傍線部 a「フされ」のカタカナ部分を漢字に直すとき、最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア 伏           イ 付           ウ 浮           エ 服           オ 賦

問二 二重傍線部 b「担われる」の漢字の読みをひらがなで記せ。

問三 傍線部 1「表裏一体の関係にあった」とあるが、その理由の説明として最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア 「歴史」は、本来、虚構や幻想を含まず、客観的な観察に基づく記述であるから

イ 「歴史」は、太古より語り伝えられてきた神話や伝説から派生してきたものであるから

ウ 「近代」を支えてきた主要な理念は、西欧人たちが作り出した壮大な共同幻想の所産であるから

エ 普遍的な発展法則に従って進行していく「物語」が、特に「歴史」と呼ばれるようになったから

オ 西欧諸国の言語では「歴史」と「物語」は同じ単語で表わされ、近代以前には概念的にも未分化であったから

問四 傍線部 2「近代的に主体化された者たち」と内容的に重なるのはどれか。最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア ポスト工業社会に生きる人々

イ 社会の中で生きている人間たち

ウ ささまざまな価値観や視点をもつ人々

エ 文化や習慣を共有する共同体の構成員

オ 「近代」社会共通の価値観を共有する人々

問五 傍線部3『歴史(『大きな物語』は再び『小』物語』化していき』とあるが、主な理由とされているのは何か。最適なもの  
次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア 経済成長の鈍化

イ 「物語的知」への回帰

ウ 西欧人主導の「近代」化

エ 「歴史哲学」もしくは「歴史の目的論」の終焉

オ 人々のアイデンティティ、価値観、世界観の分散化

問六 傍線部4『物語的知』の社会的機能』を具体的に説明した箇所を本文から四十字以内で抜き出し、最初と最後の五字を記せ  
(句読点等も一字に数える)。

問七 空欄 A に入れるのに最適な語を次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア 進歩

イ 啓蒙

ウ 共同幻想

エ 歴史の再物語化

オ ポストモダン化

問八 傍線部5「何らかの形で『物語』に依拠せざるを得ない」とあるが、その理由はなぜか。最適なものを次のア〜オから選び、記号をマークせよ。

ア 専門家の共有する「科学的知」もまた人間同士の言語ゲームにほかならず、「物語的知」を解体して構築されてきたものであるから

イ 太古から伝承されてきた民衆の知ともいうべき「物語的知」には、専門家集団の共有する「科学的知」の及ばない説得力があるから

ウ 専門家の規則を共有していない人々を納得させるためには、人々が慣習的に持つている知の構造に置換して説明する以外に方法がないから

エ 一般の人に向けての「啓蒙」活動は、慣習的な民衆の知である「物語的知」を完全に解体し、「科学的知」に置き換えるまでには至っていないから

オ 「科学的知」も「物語的知」も、それぞれ単独では自らの「正統性」を立証する方法を持ち合わせておらず、両者が協同することが必要であるから

問九 傍線部6「『物語』的な慣習」とあるが、どのような点が「『物語』的」とされているか。その説明として最適なものを次のア〜オから選び、記号をマークせよ。

ア 科学崇拜に関する逸話や普遍的理性崇拜に関する逸話を集める

イ 「物語的知」の権威を「科学的知」に素直に置き換えようとする

ウ ささまざまな視点を持つ人が「科学的知」の正統性をめぐって争う

エ 科学や普遍的理性を無前提に至上の価値を持つものとして崇める

オ その「物語」に依拠することの正統性をメタレベルで問い直す



問十 空欄 B に入れるのに最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

- ア 飛躍的に増加する
- イ わずかに減少する
- ウ まったくいなくなる
- エ かえって少なくなる
- オ 徐々に増加していく

問十一 傍線部 7「物語のこのような衰退のうちにく見ることまでできる」とあるが、本文の筆者はこれをどのように捉えているか。最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア 自由で豊かな精神生活をもたらし、その結果、それまで人々が慣習的に共有してきた「物語的知」に対する信頼性が失われていった。

イ 人々の生活を豊かにする手段としてのテクノロジーが発達し、その結果、旧来の物語に対する関心が急速に失われていった。

ウ その成果を個別に享受する方向に人々の行動様式を変化させ、その結果、人々の価値観は分散化し、「大きな物語」は「(小)物語」化していった。

エ テクノロジー、特に情報テクノロジーの発達は、それぞれの個人の生き方に合った「物語」の創出を促し、その結果、「物語」は再び活況を呈するようになった。

オ 情報テクノロジーの発達は、ポスト工業化の壁に突き当たっていた「左」「右」の物語それぞれの問題点を明らかにし、その結果、それらの物語の解体を遅らせた。

問十二 波線部 a～e の「物語」は、それぞれ文中にいう「大きな物語」「(小)物語」のいずれに該当するか。「大きな物語」の場合は解答欄の「大」を、「(小)物語」の場合は解答欄の「小」をそれぞれマークせよ。

二 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

夏になるとセントラルパークを歩きたくなる。今年は、十何年ぶりに南端から北端まで半日かけて歩き、その見事さにあらためて驚いた。だがその意匠の美と妙でさえも、そこに介在する「階級政治」を帳消しにすることはありえないだろう。

それにしてもセントラルパークとはなにか？ それはニューヨーク最大の公園であり、摩天楼がずらずら並ぶ中に一五三ブロックにもわたり開いた緑の穴である。だがそのニューヨーク市にとっての複合的な意義と機能について考えると、最終的にそれが何かわからなくなる。

まずその意匠<sup>a</sup>には、ほかにはない徹底性<sup>1</sup>がある。それは「自然」を人工的に構築する意志である。その徹底性が来園者のために独特な「遊歩」を演出する。気候のよい時分、人びとは芝生に寝転がり、ひなたぼっこをし、本を読み、語り合っている。界限<sup>b</sup>の金持ちがジョギングをしている。観光客用の馬車を通る。それらもいいたろう。だがわたしの考えでは、この公園は何よりも歩くために考案された空間である。岩盤をダイナマイトで破壊して構築された適度の起伏、そこに露出する大きな岩場、適度に手を加えられた植樹群——これらは文明以前にマンハッタン島がそうであったかのような無垢の自然を表象代行している。そこを通る小径は、公園外の市街区の縦横の通りと対照的に見事にうねりくねっている。だが結局そこを歩く主体にとって、何よりも重要なのは、おそらくこの自然環境の外の景観なのである。この公園の多くの自然環境は、それ自体を眺めるためというより、それを通しておりおり顔を出す文明を見るための舞台なのだ。私は秘かにこれを「逆借景」と呼んでいる。

たとえば西九〇と九一丁目を占める一九三〇年代初頭に建設されたアールデコ建築の高級アパート・コンプレックス「エルドラド」の眺めは壮観である。そこに住む有力者たちはさぞ A であろう。つまりこれは文明を生きる者が、好きなときに日常を忘れて迷いこみ、しばし自然に親しんだ後、自分が属する世界を見て、あらためてその素晴らしさを確認するための装置なのである。

美術史家ユベール・ダミッシュは、当公園について「文化が自然から離れていくドラマを永遠に展示し続けるための自然の剥製」と呼んだ。つまりセントラルパークは、己を不変に保つことで、外の格子状市街区において永遠に続くだろう B による変化を観察し讃えるための装置である。

一八一一年に格子状街路の都市計画が正式に認知され、当市の空間構築の方向性が決定された。以後、市は人口増加の一途を辿り、市民のための何らかの公園、それも象徴的な施設の必要性が論議された。一八五七年コンペが開催され、フレデリック・ロー・オルムステッドの案が採用される。このときの肝煎りは、ここを自ら構築していく都市の象徴的始源にしようとしたに違いない。そのとき、過去の抹消が計画された。その対象となつたのは、まずオランダ人入植以前、この地で大地を領地に寛容させることなく、自然と共存することを試みていたマンセー族 (Munsee Indians) の文明である。次にこの公園の敷地とその界限にあつたが、工事にあつて強制的に立ち退かされたアイルランド系、ドイツ系、 C 系の農民たちである。彼らは、コレラの流行を防ぐためにダウスタウンで家畜を飼うことを禁止され、この地か、さらに以北に移住していた。またニューヨーク初のアフロ・アメリカン所有の居住区「セネカ・ヴィレッジ」も抹消された。黒人資産家と三つの教会が、一八二五年頃から土地を購入しはじめ、農民を中心とするコミュニティを構築するまでに至っていた。そして最後に、この「自然の剥製」を構築するために一八六〇から一八七三年までのあいだ費やされた、ほぼ二万人の D 労働者たちの労働である。これらの抹消がすなわちニューヨーク市の有力者が理想とする「自然」の謂いであつた。

セントラルパークは定義上、公共施設である。だがこの「公共」はなかなかすべての市民のためとはならない。当市にとって象徴的な公園を造る案が提出されたとき、すでにこの周囲を高級住宅街にする開発計画が伏線としてあつた。そのことによつて、地価が大幅に跳ね上つた。片や当時そのほとんどが、ダウスタウンに居住していた E 大衆は、公園の南端にあたる五九丁目まで来るには、高額の馬車には乗れないため、歩くしかなかった。当公園は、市営の非営利団体であるセントラルパーク管理委員会が、ニューヨーク市の公園課と提携し管理／営業している。この組織を運営する委員会は、公園のまわりに居住する

F から構成され、彼らの視点からの公共の益がすべてに優先される。たとえばイラク戦争開戦以後、大芝生場における反戦集会は、一度も認可されていない。しかしそれでもニューヨーク G は、この公園を可能な限り自分たちの空間として使おうとするだろう。その係争が続く限り、われわれは同時にその美を謳歌していくことができる。

(高祖岩三郎『死にゆく都市、回歸する巷』より)

問一 二重傍線部 a「意匠」b「界限」の読みをひらがなで記せ。

問二 傍線部 1「徹底性」とあるが、何に關しての徹底性か。最適なものを次のアから選び、記号をマークせよ。

ア 南端から北端まで歩き通すために半日あまりかかるほど広大な公園を「遊歩」させてしまうほどの演出力

イ 高い地価が見込まれるにもかかわらず、最も賑わいある地域のただなかに緑を残しておこうとする環境志向

ウ いまや手付かずの「自然」などにも存在せず、人の手をかけずして環境維持は不可能だという冷徹な認識

エ 住民の私的な既得権よりも、市に対する人々の思いを象徴する文化施設の意義の方を選んだ公共精神

オ 人工の産物であり虚構であるにもかかわらず、完璧な自然らしさを装おうとする欺瞞

問三 傍線部 2「これらは文明以前にマンハッタン島がそつであつたかのような無垢の自然を表象代行している」とあるが、筆者

はこの表現にどんな意味合いをこめているか。最適なものを次のアから選び、記号をマークせよ。

ア 太古の自然を破壊しながら発展を続ける都市文明に対する反省

イ 自然な景観が人工的に捏造されたものであることに対する皮肉

ウ 無垢の自然を作り出すことに成功した高度な技術に対する賞賛

エ 今では消滅した太古の自然の面影に思いをめぐらす懐旧の念

オ 公園のそこそこに見られる的を外れた自然イメージに対する嘲笑

問四 空欄 **A** にはどのような語句が入るか。最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア 鼻が高い      イ 顔が広い      ウ 肩身が狭い      エ 目が高い      オ 目にあまる

問五 空欄 **B** にはどのような語句が入るか。最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア 発明      イ 乱獲      ウ 墮落      エ 収奪      オ 開発

問六 傍線部「入植」の意味として最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア 土地や植民地に開拓に入つて生活すること

イ 荒地を切り開いて耕作地や利用可能な敷地にすること

ウ 海外移住者がその土地に居住区を作り経済的に成功すること

エ 海外に原料や市場を求めて進出すること

オ 植物が広がっていくように土地に人びとが増えること

問七 空欄 **C** にはどのような語句が入るか。最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア 労働者      イ 民衆      ウ 先住民      エ 有力者      オ 移民

問八 空欄 **D** にはどのような語句が入るか。最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア 労働者      イ 民衆      ウ 先住民      エ 有力者      オ 移民

問九 空欄 **E** にはどのような語句が入るか。最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア 労働者      イ 民衆      ウ 先住民      エ 有力者      オ 移民

問十 空欄 **F** にはどのような語句が入るか。最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア 労働者      イ 民衆      ウ 先住民      エ 有力者      オ 移民

問十一 空欄 **G** にはどのような語句が入るか。最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア 労働者      イ 民衆      ウ 先住民      エ 有力者      オ 移民

問十二 波線部「最終的にそれが何か分からなくなる」とあるが、その理由として適切ではないものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

- ア そこではだれもが気ままな時を過ごしてよいことになっているが、実のところ歩くことしか許されないから
- イ 自然そのものごとく造園されているが、実のところそれは徹底した人工の所産だから
- ウ 公園の美しさそれ自体を眺める場であるというより、むしろ公園の外に広がる文明を見るための場所だから
- エ 定義上、公園は公共施設だが、その公共の益を決定するのは公園のまわりに住むことのできる特権階級者だから
- オ 管理委員会は公園の使用法を規制しようとするが、民衆はそこを自分たちの空間として使うことをあきらめないから



